



石原知事突然の辞職に都民の怒りが集中

無駄に使った都民の税金かえしてほしい

一〇月二五日に緊急記者会見で、新党結成とともに都知事の辞職を表明した石原知事に対し、「いきなり辞任は無責任すぎる」「政策がゆきづまり今期はハナからやる気なし。辞任が遅すぎたのでは」など、都民から怒りと非難の声があがっています。

●五輪招致費用が二回分ムダに

事実上の責任者を失った20年五輪招致委員会は「今までの積み重ねがあり招致運動に影響ない」とコメントしましたが、前回ほど盛り上がり上



王子駅前でするそね・池内と宇都宮区議

に知事の辞職で打撃は隠せません。

団地のある女性は「前回費用150億円も次があるから無駄じゃないと言っていたが、2回分オジャンにした責任は重い」と憤慨しました。

●くらし分野には光が：

一方、生活分野を担当する北区の幹部職員は「都職員も知事に逆らうと左遷されたり大変だったようだが、これで多少やりやすくなるかも」ともらっていました。

都営団地近くのお年寄り「石原さんがストップさせた都営住宅の新築をぜひ再開して」と切望しています。

●たかまる共産党への期待

そねはじめ前都議は訪問・宣伝で「原発や消費税など重要政策で一致しない政党を石原氏が無理やりまとめても破たんするだけ。真の第三局は国民の立場で一貫した共産党の躍進で」と訴えています。

年輩の方からは「石原さんが国政を握ったら怖い」「今度こそ共産党とそねさん・池内さんが頑張って」と激励が寄せられています。

浮間都営住宅建替え計画変更は設計ミスが一要因

10月19日にそねはじめ前都議は永井とも子区議とともに都の東部住宅事務所を訪ね、浮間1丁目の都営住宅建替えの設計変更について事実経過を質し、今後入居する仮移転居住者への説明を行うよう要望しました。

◆建設戸数減で次の建替えにも影響

同都営住宅は当初説明会で最高14階2棟に建替えると発表されましたが、途中で10階建て1棟に変更され、建設する戸数も大幅に縮小されました。

都の岩田開発課長は、原因として土壌汚染対策や周辺住民への配慮とともに、都の側に設計ミスで建築基準法違反があったことを認めました。

◆もどり入居する人の不安解消を

そね前都議は、仮移転者はバラバラに住んで不安を抱えており、都の説明責任を果たすことが必要と要望しました。

また次の建替え事業への影響を問いましたが都側は明確な今後の計画を示しませんでした。

北社保病院の医療水準は住民の力で守り抜く 病院の拡充めざす会が医療法人への譲渡問題を協議

8月14日の厚生労働省通達をきっかけに、国の財産だった公的病院から、運営している医療法人が買い取る事となった北社保病院について、26年にわたり病院の存続・拡充を住民・患者の側から支えてきた「北社保病院の拡充をめざす会」が対応を協議しました。

【 早期に病院や北区との意見交換を 】

「買ってくれるならどこでも」という競争入札ではなく、地域医療振興協会がへき地や無医村に若手医師を送る拠点として優先して譲渡を受けることとなります。

また343ベッドへの増築が約束されていることは存続と充実を求め続けた住民運動の成果として確信にすること。

また、病院や北区との懇談と要望活動を進めようと話し合われました。

【 増築工事再開を急ぐために 】

同時に、国からの譲渡契約が確定するのに時間がかかるため、2か月以上遅れている増築工事がそれまで延期されないよう働きかけを強めることになりました。

社保病院全面開設を祝うつどいに参加の右からそねはじめ前都議、さがら・のの山区議(08年)



そねはじめ銀河鉄道の旅 第一夜

今号からそねはじめレポートは毎週交替で東京民報と赤旗日刊紙・日曜版とに折り込むことにします。切り絵シリーズと交替で、東京民報には新たに「そねはじめ銀河鉄道の旅」を連載していきます。

昨年の震災と津波以来、見直されつつある宮沢賢治の詩や童話の世界・現代のわれわれを魅了してやまない賢治の魅力の秘密を探りに銀河鉄道で賢治童話の世界を旅していきたいと思えます。

里山の先駆け・羅須地人協会

賢治童話には多くの生き物が登場し、民話と同じアニミズムの伝統が生きています。しかし民話は自然はおろそかにできないものという畏れが強いのに、賢治童話では人間が自然と共生していこうとします。

童話「なめとこ山の熊」では、生活のために好きな熊を殺す小十郎と、分かっている撃たれる熊たちとの生死の境目での心の交流が描かれています。「セロ弾きのゴーシュ」では、毎晩訪れる動物たちの頼みごとを通じて、ゴーシュ自身が音楽の感性を学びます。失われつつある自然と人間の交流の瞬間が描かれます。

戦後経済成長の一方で自然は破壊され、ついに昨年原発事故で県を呑み込むほどの死の世界が現出しました。自然の生態系を守ることなしに人間の生活環境も守れないのです。

起伏の多い地形に合わせて人々が自然と巧みに共生してきたのが「里山」です。賢治は80年も前に里山のくらしの中で科学を生かし音楽を楽しむ生き方を「羅須地人協会」で実践しようとしていました。

そこには現代のわれわれにも問われている、自然との共生と科学進歩の融合した姿がかいま見えるのです。

しかし、賢治の魅力はそれだけではありません。(続く) <写真は賢治生誕百年当時、盛岡の賢治像前の筆者>

